

## 保育室での動物飼育に関する基礎的研究\*

二 宮 穰\*\*

### I. はじめに

幼稚園・保育所などの保育施設では、何らかの動物を飼育し、世話や観察を行って保育に役立てているところが多い。動物が、単に動きまわるだけの玩具とは異なり、自分たちと同じようにものを食べ、排泄することを知ったり、それらの誕生や成長そして場合によっては死を直接経験することは、幼児にとって動物ひいては生命を理解し、愛護する心を養ううえで意義が大きい。特に、近年では動物飼育が幼児の情緒発達に良好な影響を及ぼすことも指摘されている<sup>(1)</sup>。

また、飼育動物には種類や分類群によって、繁殖が容易だったり誕生の様子が印象深いもの、成長にともなう変化が著しいもの、行動がおもしろかったり、幼児のはたらきかけに対する反応が豊かなものなど多様な特性があり、それぞれの動物がもつ特性を適切に生かすことで、保育における飼育活動の意義を一層深めたり、一定の保育効果を確実に得ることが可能になると期待される。

ところで、飼育動物のなかには大がかりな設備を必要とし屋外での飼育に適したものもあるが、保育室内でも鳥籠や水槽などの簡単な容器が用意されていれば、マイマイ(カタツムリ)、昆虫、カエルの幼生(オタマジャクシ)、トカゲなど、いわゆる小動物を比較的容易に飼うことができる。そして、屋外での飼育動物が、鳥類と比較的大型の哺乳類にはほぼ限定されるのに対し、保育室では小型ではあるが多様な動物を飼育し、それぞれの特徴を生かした飼育活動を展開することが可能である。また、幼児がある動物に興味をもって屋外や家庭から持ち込んだ際、その興味や関心にこたえて即座に飼いはじめるような柔軟な対応もしやすいであろう。

以上のような点から、保育室での動物飼育は、飼育活動として重要性が高いと考えられる。それでは、保育室では実際にどのような動物が飼育され、どのように保育にとり入れられているのだろうか。この問題に関する近年のまとまった報告は非常に少いようである<sup>(2)</sup>。筆者

は、昨平成6年度、一年間にわたって保育室でどのような動物が飼育されているか調査したので、その結果を報告する。

### II. 方 法

#### 1. 調査対象

今回の調査は、本学キャンパス内の十文字短大附属幼稚園において行った。同幼稚園の平成6年度一学期始業時のクラス編成と在籍園児数は以下の通りであった。

5歳児(年長組)2クラス

(男子17名, 女子18名)(男子19名, 女子17名)

4歳児(年中組)2クラス

(男子16名, 女子17名)(男子18名, 女子17名)

3歳児(年少組)2クラス

(男子13名, 女子12名)(男子15名, 女子12名)

その後、転入出にともない人数に若干の変動があったが、大きな変化はなかった。

同幼稚園の園庭には、ヒマラヤスギの並木をはじめとして、サクラ、フジ、キウイ、ハナズオウ、カイドウなどの樹木が植栽されているほか、野鳥により媒介された種子から発芽したと思われるクワ、エノキなどの稚樹も見られる。また、園庭の周縁部や築山には夏季になると雑草が茂り、園児にとって格好の虫とりの場になっている。さらに園舎に隣接して小規模ながら草地があり、保育者の保護のもと、虫とりや草花摘みをする園児の姿がよく見られた。この他、キャンパス内の奥にある畑(例年、主にサツマイモを栽培)、栗林、雑木林などが保育に利用されることもあり、かなり自然の豊かな保育環境に恵まれているといえるだろう。しかしながら、小川、池などの水辺と接する場は全くない。

本学キャンパスは武蔵野台地の一角に位置し、周囲は近年宅地化が進んでいるものの畑の広がる田園地帯で、草原は少ないが雑木林はまだ各所に残っており、昆虫などの小動物や野鳥も少なくない。しかし、元来、水の乏しい土地であるため、河川、池沼、湿地、水田など、いわゆる水辺の環境は、日常の保育のなかで園から気軽に

\* A Basic Study of Animal Tending in a Classroom of Kindergarten

\*\* Yutaka, NINOMIYA the Department of Infant Education

歩いて行くことのできる範囲には存在しない。

## 2. 調査期間

平成6年度、すなわち平成6年(1994年)4月から平成7年(1995年)3月までとした。調査頻度は毎週1回を目標としたが、実施できなかった週もあり、実際の調査回数は、一学期13回(未調査2週)、二学期11回(未調査5週)、三学期2回(未調査8週)の計26回であった。調査できなかった週は11月下旬から3月に集中しているが、元々、野外では小動物の姿が少くなる時期でもあり、後述のように調査結果にはあまり影響しなかったものと考えられる。また、調査は主に月曜日に行った。

## 3. 調査方法

各保育室を訪れて、クラスごとに飼育されている動物を確認し、記録した。新しく飼いはじめた動物や、死亡したり見あたらなくなった動物については、状況に応じて、その由来、原因などの事情や、園児の反応などを担任から聞き取るようにした。

飼育動物と見なしたのは、多少なりとも飼う意思をもって保育室内またはこれに付随する廊下、テラスに確保されている動物とした。具体的には、鳥籠・虫籠・水槽・イチゴパック・プリンカップ・袋・紙箱などの容器内に人為的に収容されたもので、エサが与えられていたり、生物名などを示したラベルが添付されていたり、逃亡を防止するための何らかの工夫(蓋など)が見られれば申し分ない。また、鉢植えの食樹ごと室内にとり入れられたチョウの幼虫なども、飼う意思が明瞭であるとして飼育動物に含めた。

一方、次のようなものは飼育動物とは見なさなかった。すなわち、飼う意思とは無関係に飼育容器内に存在したと思われる動物(ダンゴムシ飼育のテラリウム内に棲みついたトビムシ、キンギョの水槽に落ちていたハアリなど)、飼育動物のエサとして与えられた動物(ウスバカゲロウの幼虫に与えられたアリやダンゴムシ、カエルに与えられたアブラムシなど)で、捕食寄生者(アゲハの蛹から脱出したアゲハヒメバチなど)についても、意図的に飼育されたものとは考えられないことから除外した。実際には、その動物が持ち込まれた経緯などを担任から聞くことで、飼育動物と見なせるかどうか確認できることが多く、判断に迷うような事例は、ごく少なかった。

なお、今回の調査の趣旨から、特定の保育室に属さず園庭や玄関ホールなど共有のスペースに設置された飼育設備で飼われているウサギ、セキセイインコ、キンギョなどは調査結果から除外した。

## III. 結果および考察

### 1. 記録された飼育動物

記録された動物の消長を表1にまとめた。

調査にあたっては、飼育容器ごとに収容されている動物の種類・個体数を記録するよう努めたが、分類群によっては種の同定が困難だったものもあり、個体数についても飼育容器内に小型の動物が多数入れられていたり、かくれが豊富な場合には記録できないことが多かった。そのため本報告では、基本的にそれぞれの目(order)について、調査日ごとに飼育していたクラス数(0~6クラス)を示し、目より下の分類階級については適宜、上科~種のレベルで内訳を示すことにした<sup>(3)(4)</sup>。また、成長段階によって形態や生態、飼育方法などが大きく異なるものについても、内訳として別々に示した場合がある。

今回、記録された動物は3動物門7綱16目であった。1年限りの調査で、飼育される可能性のある動物を網羅できたとは思えないが、園の周囲の環境を考えると門のレベルで今後追加されそうなものは環形動物門(ミミズ類など)くらいであろう<sup>(5)</sup>。

実際に幼児の動物への接し方、飼育の様子などを観察していると、カブトムシのように明らかに近縁種から区別して扱われているものと、各種のマイマイ類がまとめて「カタツムリ」と呼ばれているように十把一絡げに同種のように扱われている分類群とがあることに気づく。従って、飼育動物のまとめ方に関しても、特に目より下の分類階級については主たる飼育者である幼児の感覚を尊重して、彼らが同じ生き物であるから見なしている(大人の言葉で言えば、同一種類あるいは同一グループの生物ということになろうか)動物ごとにまとめる必要性があるかも知れない。しかし、現状では幼児の具体的な分類感覚については未調査なので、表1においても鞘翅目の内訳としてカブトムシをその他のコガネムシ類から分けて示した以外は、一般的な分類に従った。

II.2.調査期間の項で述べたように、11月21日以降3月10日までは、冬休みを除く14週中9週が調査できないまま終わっている。しかし、野外から持ち込まれて飼育が始まるような動物の多くはこの時期ほとんど活動せず見つけにくいこと、実際、この期間中飼育されていた動物の大半は10月下旬までに飼育が始っており、新たに記録されたものはヒシバッタ(1クラス)、スズメガ類(1クラス)のみであること、また姿を消した動物もマイマイ類(2クラス)、キリギリス類(1クラス)だけであることから、この空白は調査結果にはあまり影響がなかったものと考えてよいであろう。

以下、それぞれの目について、飼育時の概況を述べる。

#### ①柄眼目

梅雨入り前後から一学期末にかけて、ミスジマイマイ、ウスカワマイマイなどが園児によって保育室によく持ち込まれた。良好な条件（湿潤なテラリウム）で飼育されていることが多かったが、水の入れすぎが原因で死亡したのではないと思われる事例があった。年長1クラスでは繁殖し、7月4日以降、幼ないカタツムリが多数観察され、これらは二学期も継続して飼育されていた。

#### ②等脚目

冬を除いてオカダンゴムシの採取は日常的に行われており、園庭から持ち込まれることが多かった。年長1クラスでは、一学期にテラリウムで多数飼育されて繁殖し、6月13日以降、誕生して間もない幼虫が目立った。

#### ③十脚目

アメリカザリガニは今回の調査で唯一、全調査日に記録された。なかには、入手してからすでに数年間、担任が飼いつづけているという個体もいたが、新しく持ち込まれることも多く、入れ替りが目立った。新しく飼いはじめたクラスでは、比較的狭いアクアリウムに複数の個体が入られることが多く、共喰いなどの原因で減少し結局1容器1個体になるという経過が2例見られた。

#### ④トンボ目

恐らく園児によって園庭で採集されたと思われるアキアカネが2個体、年長組の水槽に入れられていた。飼育動物と見なすかどうか微妙な状況であったが、一応記録した。

#### ⑤カマキリ目

園児や保育者によって持ち込まれた卵鞘（主にオオカマキリのもの）の多くは、5月中旬以降孵化し、幼虫の多くは野外に放されたほか、園児が持ち帰ったり、飼育容器内で死んだ個体も目についた。二学期には園庭や隣接する草地などで園児の採集したコカマキリ、オオカマキリなどの成虫が、短期間飼育されていた。また、三学期に1クラスで保管されていたオオカマキリの卵鞘は、三月の初旬に孵化した。室内の高温が原因と考えられる。

#### ⑥直翅目

年長1クラスでは一学期にも幼虫が飼育されていたが、記録が増えるのは9月下旬から10月半ばにかけてである。主なものは、コオロギ類ではエンマコオロギ、ツツレサセコオロギ、オカメコオロギ類、スズムシ（園児が家庭から持参したもの）など、キリギリス類ではツユムシ、ウスイロササキリ、クビキリギス、クサキリ、カヤキリ、クツワムシなど、バッタ類ではショウリョウ

バッタ、トノサマバッタ、イナゴ類などで、これらの大半は園庭やキャンパス内で園児が採集したものである。年少1クラス、年長1クラスでは土を入れた水槽に草を植え典型的なテラリウムを作って飼育していたが、どのクラスでも過密と容器内の乾燥が目立った。

#### ⑦半翅目

継続的に飼育されたものはなかった。7月20日に年長1クラスで、土を薄く敷いたテラリウム内にアブラゼミと思われる羽化殻が1つだけ入れてあるのが見られた。これを飼育動物と見なすかどうかは疑問があり、成人の感覚ではゼミの脱殻が生きていないのは自明のことであるが、7月13日にはテラリウム自体存在していなかった可能性が高いことから、あるいは園児が飼う意思をもって置いたのかも知れないと考え、記録にとどめた。

#### ⑧脈翅目

ウスバカゲロウの幼虫、いわゆるアリジゴクは園舎の裏や園庭の物置・固定遊具の下などに4月下旬頃から巣を作っているのが見られる。6月中旬以降、年長1クラスで乾燥したテラリウム内にアリ類、オカダンゴムシなどをエサとして飼育され、10月12日頃2頭の成虫が羽化し、野外に放たれた。

#### ⑨鱗翅目

飼育されたのはすべて幼虫もしくは蛹で、羽化した成虫は野外へ放された。最もよく飼われたのは、アゲハ、クロアゲハ、カラスアゲハなど柑橘類を食樹とするアゲハチョウ属の各種で、中齢以降の幼虫を複数採取して飼育した場合、必ず何個体かは羽化に至った。10月以降蛹化したアゲハは多くが越冬蛹となり、特別な管理をしなくとも保育室内で越冬し、平成7年4月中旬から順次羽化している。オオミドリシジミは、筆者が園周辺の雑木林で採集した幼虫を年長2クラスに持ち込んだもので、5月末から6月にかけて羽化した。ミノガ類は、主にオオミノガの幼虫（典型的なミノムシ）が二学期以降、年長1クラスで飼いつづけられた。また、ジャクガ類の幼虫（いわゆるシャクトリムシ）や地中から掘り出されたと思われるスズメガ類の蛹が見られたが、いずれも羽化には至らなかった。

#### ⑩鞘翅目

畑や花壇の手入れの際、地中から掘り出されたコガネムシ類の幼虫が園児によって持ち込まれる例が目立った。しかし殆どの場合、土を入れただけでエサとなる植物質に乏しいテラリウムで飼育され、羽化に至らなかった。成虫は、ゴミムシ類、カブトムシ、カナブン、コガネムシが短期間飼育された。クワガタムシ類は、年長1クラスで、おが屑を入れ朽木を立てたテラリウムで飼育されていたが、常にどこかに潜っており、姿を直接確認

することができなかった。また、6月にはナミテントウの蛹が多数採取され羽化した他、シテムシ類の幼虫がテラリウムに入れられていたこともあった。

#### ⑪膜翅目

4月から5月にかけて、年長1クラスでクロオオアリが飼育された。水槽の上端近くまで土を入れたテラリウムで巣を作らせ、エサも与えてあったが、やがて土の表面にカビが生えるなどして飼育条件が悪化し、野外に帰された。また二学期のはじめには、園庭のイネ科雑草の葉に綿の塊のようなものがいくつも見られ、年長2クラスに持ち込まれた。これは一種の虫癭<sup>えい</sup>だったようで、間もなく体長2mmほどのハチが多数羽化した。タマバチ類ではないかと思われるが未同定である。人体には全く害はないものと考えられる。

#### ⑫コイ目

ドジョオは年少・年中各1クラスで、体長10cm程のものが1個体ずつ、前年度から引きつづき飼育されていたが、夏休み中に死亡した。また10月には年中1クラスに園児が大型のドジョオ1個体を持参したが、間もなく死亡した。キンギョ類は、前年度から飼育されていたものの他、4月下旬には新しく購入された個体が加わったが死ぬものが目立ち、生き残ったものも夏休み中に死亡した。夏休み中、魚類は玄関ホールに水槽を集め、教職員が数日置きに世話をしていたが、平成6年夏の異常な高温に耐え切れなかったようである。

#### ⑬無尾目

5月初旬からヒキガエルをはじめとする各種のカエルの幼生(オタマジャクシ)が、保育者や園児によって持ち込まれた。いずれも野山へ出かけた際に採取されたもので、園の周辺で得られたものはなかったと思われる。6月に入り、次々と変態を終えて成体のカエルとなったが、成体の飼育は難しかったようである。例外的に、年少1クラスでは成体となってから持ち込まれた若いウシガエルが7月と9月に飼育されていた。結構元気で、園児がつかまえて来て与えるアリをよく食べていたという。

#### ⑭カメ目

クサガメ雌雄各一個体が、数年前から飼育されている。5月の連休あけに越冬用の容器から掘り出して一学期は年長組、二学期は年中組が交代で飼育を担当した。ベビーバスで飼われ、いつでも手を触れられるようになっており、園児がエサとしてオカダンゴムシ、ミミズ類などを採取して来て与える様子が頻繁に見られた。二学期終了間近に越冬用の容器に移されたが、越冬中は特定のクラスの管理下にあったわけではないので、記録から除外した。

#### ⑮有鱗目

園の周辺で採取されたと思われるカナヘビが時折飼育されていたが、比較的短期間で死亡したり野外へ戻されたりした。

#### ⑯齧歯目

ゴールデンハムスターが各クラスで飼育された。平成4年秋に購入された個体が5月中旬に行方不明になった後、5月末には園児の家庭で繁殖した生後1カ月ほどのものが6個体寄贈された。これらは死亡したり入れ替りがあったものの4クラス前後で飼育が続いている。籠から出して園児が遊んでいるうち、ほんの僅な隙に姿が見えなくなり、行方不明となったり、死亡した状態で発見される例が数件あった。

保育室での飼育状況を継続的に調査してみると、前述のクサガメやゴールデンハムスターのように長期にわたって飼いつけられているものは少数で、飼育動物の入れ替りが激しいことに気づく。その理由として、

- ・死亡する動物が多い。
- ・特定の期間だけ飼育される動物が多い。

の2点を挙げることができる。

前者については、動物がその寿命を全うする場合、たとえば昆虫が特定の季節を迎えて死ぬような場合の他に、飼育条件に問題があったと考えられる事例が少なかった。具体的には、飼育容器内の乾燥・過湿や極端な高温・低温、エサの与えすぎや適当なエサが与えられなかったこと、さらには過密などが直接、間接の死亡原因になったと思われる例が目についた。あまりに不適切な飼いは改善されることが望ましいが、むしろ、小動物を飼育する以上、死はある程度避けられない事態ととらえるべきではないだろうか。そして、死に方が非常にショッキングな場合を除き、保育者がいたずらに忌避したり隠したりせずに、幼児に伝え共に受けとめることが大切であろう。

後者については、単純に飼育条件の悪化が原因で野外に放されるという経過以外に、動物の特性に応じて、飼育の容易な特定の成長段階にある期間だけ飼われることが多かった。典型的な例は鱗翅目や無尾目で、幼虫やオタマジャクシの期間だけ世話をして成長する様子を間近に観察し、変態を完了して飼育の難しいチョウ・ガやカエルになると野外へ帰されるという経過が普通に見られた。これなどは、動物のもつ特性をうまく生かした飼育活動と言えるのではないだろうか。

また、日常的な世話を欠かせない動物飼育にとって、夏・冬・春期の休業期間にどう対処するかは切実な問題である。教職員や希望のあった園児の家庭に一時的に動物を持ち帰って飼育したり、水棲動物は園舎の玄関ホー

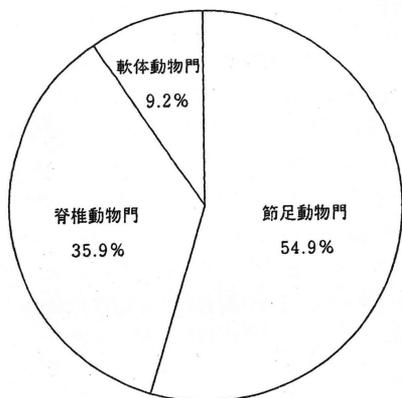


図 保育室で飼育された動物の内訳

ルに水槽を集めて出勤した教職員が世話をするなどの対応をしたが、特に夏休みを境に飼育が中断する例が多かった。

## 2. 飼育頻度からみた飼育動物

前節で挙げた飼育動物のなかには、一時的に保育室に存在しただけのものもあれば、長期にわたって飼いつけられたり、多くのクラスで飼われたりした、いわば飼育される頻度（以下、飼育頻度と呼ぶことにする）の高い動物もいた。本節では、飼育頻度を手掛りとして飼育動物の特性を考えてみたい。

表1の右端には、それぞれの目について、各調査日に飼育されていることが確認できたクラス数の総和を、累積記録クラス数として百分率とともに示した。以下、この数値を飼育頻度を表す指標として用いる。

まず、今回記録された3つの動物門ごとに、所属する目の累積記録クラス数を合計し、比較した(図)。過半数を占め、最も飼育頻度の高かった節足動物は、多様な環境に適応し種類数も個体数も最も豊富な分類群で、園内やその周辺にもさまざまなものが棲息している。そのため園児によって保育室へ持ち込まれることも多く、この結果は当然と考えられる。これに次ぐ脊椎動物は、飼育された種類数も個体数も節足動物と比べればはるかに少なかったが、より長期間飼いつけられることが多く、飼育頻度を高めた。軟体動物は、マイマイ類いわゆるカタツムリしか飼育されなかったが、そのみで全体の1割弱を占め、存在感を示した。

次に、記録された16の目を、累積記録クラス数の多い順に示したのが表2である。

累積記録クラス数と飼育状況から判断して、飼育頻度を高める要素には、

表2 保育室での飼育頻度が高かった動物

順位	目	累積記録クラス数 (%)
1	齧 歯 目	67クラス(16.3%)
2	鱗 翅 目	59 (14.3 )
3	十 脚 目	41 (10.0 )
4	カマキリ目	40 ( 9.7 )
5	柄 眼 目	38 ( 9.2 )
6	コ イ 目	29 ( 7.0 )
6	無 尾 目	29 ( 7.0 )
8	直 翅 目	25 ( 6.1 )
8	鞘 翅 目	25 ( 6.1 )
10	等 脚 目	17 ( 4.1 )
10	カ メ 目	17 ( 4.1 )
12	脈 翅 目	10 ( 2.4 )
13	膜 翅 目	6 ( 1.4 )
13	有 鱗 目	6 ( 1.4 )
15	半 翅 目	2 ( 0.5 )
16	ト ン ボ 目	1 ( 0.2 )
	合 計	412 (100.0 )

(a) 寿命が比較的長く、長期にわたって飼育が継続する。

(b) 保育室へ持ち込まれる機会が多い。

の2つが考えられる。

(a)の要素は、ゴールデンハムスター（齧歯目）、クサガメの他、今回の調査ではあまり長生きしなかったが、ドジョオ、キンギョ（コイ目）でも強いと思われる。これらの動物のうち、ゴールデンハムスターとクサガメは、触ったり、エサを与えたりする園児の姿がよく見られ、今回記録された飼育動物のなかでは、園児とのかかわりが最も親密であったと言える。

同じように飼育期間は比較的長期にわたるが、上記の動物とは少々性格が異なるのが、アゲハの越冬蛹（鱗翅目）やカマキリの卵鞘である。これらは、羽化や孵化の時期を春に合わせるため、数ヵ月から場合によっては半年以上に及ぶ休眠（この場合は、いわゆる冬眠）を行う。休眠中は外見上の変化もなく、特別な世話をする必要もないため、この期間中の管理は飼育というより保管に近い。従って、アゲハでは夏に発生する世代に比べて、カマキリでは幼虫や成虫に比べて、飼育期間は大幅に長くなるが、休眠中は園児の関心を引くことも殆どなかったようである。

(b)の要素が強い動物は、1個体の飼育期間や生存期間が短い場合でも、しばしば新しい個体が持ち込まれるために、種あるいは分類群としては、しょっちゅう又は長期間存在する傾向がある。また、多くのクラスで飼育さ

れやすい。この典型的な例は直翅目で、二学期が始まると、雑草で覆われた園庭の築山周辺や園舎に隣接する草地在り園児にとって格好の虫とりの場となり、天気の良い日には毎日のように、新しくとらえられたコオロギ、バッタなどが保育室へ持ち込まれていたようである。直翅目の他、コガネムシ類などの鞘翅目、オカダンゴムシ（等脚目）でも、この要素が強かった。また、前節で述べたように幼生期という特定の成長段階にある期間中だけ飼育される傾向が強かった鱗翅目やカエル（無尾目）も持ち込まれる機会が多く、複数のクラスで飼育されたことで累積記録クラス数が高まった。

アメリカザリガニ（十脚目）とマイマイ類（柄眼目）は、(a)、(b)の要素が共に強かった。

飼育動物の由来には、すでに飼われていたものが購入や寄贈によってもたらされる場合と、野外で採集されたものがもたらされる場合があるが、(b)の要素が強かった動物は、まず例外なく後者、それも幼児の手によるものが多い。幼児によって野外から持ち込まれる機会の多い動物は、幼児の身近に豊富に棲息し、積極的な関心をひきやすく、つかまえやすい動物である。そして保育室へ持ち込まれる時、その動物に対する幼児の興味、関心は、つかまえた直後ほどではないにしろ、依然高い状態を保っていることが多いと考えられる。従って、このような経緯で飼育が始まる場合、保育者は、ある動物に対して現に示されている幼児の興味、関心を生かした援助を行うことができる。これは、飼育活動の、少くとも開始にあたっては大きな利点といえるであろう。特に、頻繁に持ち込まれる動物では、こうした状況がほぼ確実に、しかも繰り返して生じるわけだから、保育者の側にじゅうぶんな準備があれば一般の飼育活動はもとより、それを出発点として様々な活動に無理なく発展させて行くことも可能なのではないだろうか。

保育室での飼育頻度が高かった動物とは、言い換えれば、幼児にとって保育室で接する機会の多かった動物であると考えられる。もちろん、保育室で飼育されているからといって、即、園児とのかかわりが深かったり、多かたりするわけではない。しかし、ある動物が身近に確保されていれば、自発的に、あるいは保育者の援助によって幼児が興味、関心をもった場合、すぐにその動物に対して何らかの働きかけを行うことが可能である。また、保育者があるねらいをもって保育に取り入れようとした場合、確実に利用することができる。従って、保育室での飼育頻度が高い動物は、潜在的にはあっても、保育に役立つ可能性の高い、保育にとって重要性の高い動物であると考えてよいであろう。

#### IV. おわりに

本稿では一年間の調査結果から、幼稚園の保育室で飼育された動物の消長および飼育状況と、飼育頻度からみた特性について述べた。幼児にとって、保育室は園内で最も親密な場所であり、そこで飼われている動物は、幼児をめぐる社会状況を考えあわせると、小動物とふれあう得難い機会を保証するものとして、重要性が増しているのではないかと考えられる。従って、今後、幼児と動物とのかかわりの実例や飼育動物の特性に基づいて、保育の場での望ましい飼育活動のあり方を確立して行く必要がある。

#### V. 謝辞

今回の調査を実施するにあたり、調査の要請を快諾し様々な面で協力して下さった、十文字短大附属幼稚園園長の林健造先生、および教職員の方々に、この場を借りて深く感謝いたします。

- 注(1) 桜井富士朗他「動物飼育が幼児の情緒発達に及ぼす影響」どうぶつと人 No. 2 ; 7-11 (1993)
- (2) 大沢力、峯岩男「保育における動物の考察 (I) ——幼児の成長と園内外の動物とのかかわり——」日本保育学会第48回大会研究論文集 ; 316-317
- (3) 門、綱、目の配列順序および名称は、山田常雄他編「岩波 生物学辞典 第3版」岩波書店 (1983) の「動物分類表」によった。
- (4) 昆虫綱における上位分類単位の扱いは、平嶋義宏、森本桂、多田内修「昆虫分類学」川島書店 (1989) によった。
- (5) 鷺宮学園幼稚園「鷺宮学園幼稚園公開保育資料」(1982) には、“子どもが持ち込んで来る小動物”としてミミズが挙げられている。

された実日数と延ベクラス数（累積記録クラス数）を右欄に示した。一つの分類群（亜目以下）  
 録された目では、破線の下段に内訳として、分類群もしくは種ごとの飼育クラス数を示した。

5/16 (月)	5/30 (月)	6/6 (月)	6/13 (月)	6/20 (月)	7/4 (月)	7/13 (水)	7/20 (水)
	1	2	3	4	3	4	3
1	1	1	2	1	2	1	1
2	1	1	1	1	1	1	1
2	1	1	1	1	1	1	1
4	3	1	1	1			
{3 1	{3 0	{1 0	{1 0	{1 0			
			1	1	1	1	1
					1	1	1
			1	1	1	1	
				1	1	1	1
							1
							1
		1		1	1	1	1

9/12 (月)	9/19 (月)	9/26 (月)	10/3 (月)	10/12 (水)	10/19 (水)
	2	2	1	1	
	1	1		1	
1	3	3	2	2	
1	2 1	2 1	2	2	
			1		
1	1	2	1	1	
{0 1	{0 1	{0 2	{0 1	{0 1	{
1	1	4	3	4	
1	1	4	3	3	
1	1	3	2		
		4	1	2	
1	1	1	1	1	



8/16 (月)	5/30 (月)	6/6 (月)	6/13 (月)	6/20 (月)	7/4 (月)	7/13 (水)	7/20 (水)
2	2	3	3	2	3	2	2
2	1 1	2 1	3	2	3	2	2
	1	2	2	1	3	1	
	1 {1 0	2 {2 0	2 {2 0	1 {1 1	1 3 {2 2	1 1 {1 1	1 1
2	2	2	2	2	2	2	2
2	2	2	2	2	2	2	2
2	2	2	2	2	1	1	1
3	3	2	3	3	2	2	1
{3 0	{3 0	{2 2	{3 1	{3 1	{2 1	{2 1	{1 1
1	1	1	1	1	1	1	
	1	1					
	4	5	4	3	3	1	1

9/12 (月)	9/19 (月)	9/26 (月)	10/3 (月)	10/12 (水)	10/19 (水)
1	1	2	2	2	
1 1	1	1 1	1 1	1 1	
	1	1	1	3	
	1 {1 0	1 {1 0	1 {1 0	2 {2 0	{
2	1				
2	1				
1	1	1			
{0 1	{0 1	{0 1			
	1	1	1	1	
		1	1	1	
3	5	6	3	4	